

〈研究ノート〉

絵本の魅力を伝える活動の軌跡

武井 昭也・大澤 俊信・半田 幸清・森 景子

武井昭也 札幌国際大学人文学部国際教養学科

大澤俊信 NPO 法人ビヨルクとうべつ理事長・絵本専門士

半田幸清 絵本図書館ネットワーク理事

森 景子 絵本セラピスト・絵本専門士

Trajectory of activities to convey the charm of picture books

Akiya Takei (Department of Liberal Arts and Global Studies, Faculty of Humanities, Sapporo International University)

Toshinobu Ohsawa (Chairman of NPO Bjork Tobetsu, Picture Book Specialist)

Kousei Handa (Picture Book Library Network director)

Keiko Mori (Picture Book Therapist, Picture Book Specialist)

Picture books are cultural assets for children to enjoy stories necessary for their growth and development. When we have read picture books to a variety of children, not only nursery school and kindergarten children, but also high school and university students, parents, and adults in education, and when we have participated in such situations, we have all experienced smiles and embraced the world of picture books. Ishikawa (2017) points out that picture books have an existential significance as artifacts that foster such relationships, where adults and children share through picture books the fun, enjoyment, and delight of the words and pictures expressed in the picture books.

In addition, the point that picture book mediated activities are effective for children's development is pointed out from an empiricist standpoint, such as picture book authors and users of picture books in educational and nurturing settings. Based on their experiences in creating picture books and reading to children in child-rearing and childcare settings, they offer suggestions regarding the selection of picture books and reading to children. There are studies that focus on language development through picture books, especially from the perspective of children's vocabulary acquisition, and studies that focus on parental involvement from the perspective of the most proximal area of development. These studies have revealed that interaction through picture books promotes children's vocabulary acquisition and that mothers create an environment that facilitates children's understanding of language by changing the way they interact with children according to their development. On the other hand, research on narrative memory has revealed that reading picture books repeatedly to children, the repetitive structure of picture books assists children's re-recognition and replay, and that children use narrative schema as cues in understanding stories.

Many studies and practices have pointed out that picture books nurture children's sensitivity, enrich their imagination, expand their world of play, and enhance their communication skills.

This report summarizes the activities of the "Picture Book Library Network Hokkaido," which is involved in the activities of the national organization "Picture Book Library Network," and the development of a program for training volunteers to read aloud to children, as a resource for exploring the future direction of promoting picture books and reading activities.

キーワード：絵本図書館ネットワーク

絵本

読み聞かせ

読書

Keywords : Picture Book Library Network

picture book

storytelling

reading

はじめに

絵本は子どもの発育発達に必要な物語を楽しむ文化財である。これまで保育園や幼稚園児はもとより、高校生

や大学生、保護者や教育関係の大人までさまざまに絵本を読み聞かせた際に、また、そのような場面に参加した際に、誰もが笑顔になり、絵本の世界を受け入れることを経験してきた。石川（2017）は絵本の持つ意義について、大人と子どもが絵本を介して絵本に表現された言葉

と絵の面白さ、楽しさ、歓びをわかちあう、そのような関係を育てるアーティファクトとしての存在的意味を持つと指摘している。

また、絵本を媒介とする活動が子どもの発達に有効であるとする指摘に、絵本作家や教育的、養育的な場での絵本の利用者などの経験主義的な立場からの指摘がある。絵本作成や子育てや保育の場で読み聞かせをしてきた経験から、絵本の選び方や読み聞かせなどに関して示唆を与えてくれる。絵本を介しての言語発達、特に子どもの語彙獲得に視点を当てたものや発達の最近接領域の視点から親の働きかけに焦点を当てた研究がある。これらの研究から、絵本を介したやりとりが、子どもの語彙獲得を促進すること、その際に子どもの発達に応じて母親が働きかけを変えることで、子どもが言語を理解しやすい環境を作り出していることなどが明らかとなってきた。他方、物語記憶研究から絵本を繰り返し読み聞かせることや絵本がもつ繰り返しの構造が子どもの再認や再生の援助となること、物語理解に際して子どもが物語スキーマを手がかりとしていることなどが明らかになってきている。

このように絵本が子どもの感性を育み、想像力を豊かにすること、遊びの世界を広げ、コミュニケーション能力を高める働きをすることは多くの実践と研究が指摘している。

本稿では、全国組織「絵本図書館ネットワーク」の活動に携わる「絵本図書館ネットワーク北海道」の活動と読み聞かせボランティア育成プログラム開発の活動について整理し、今後の絵本と読書活動推進の方向性を探る資料としたい。

1. 背景と目的

2000年の「子ども読書年」を契機として子どもの読書活動の推進をするため、2001年12月12日「子どもの読書活動の推進に関する法律」が公布・施行され、同法第10条により「子ども読書の日」4月23日が定められた。

「ブックスタート」は絵本にまったく触れることなく小学生になっている子どもがいることから、絵本を読んでもらった幸せなひとときをすべての子ども達に経験してもらいたいとして絵本コンサルタントのウェンディ・ターリングが1992年にイギリスのバーミンガムで発案し、単に読む(read books)のではなく、絵本を通じて体験を分かち合うこと(share books)をコンセプトとしている。イギリスにおける推進組織は1921年に設立された公益法人ブックトラストである。

日本ではこの「ブックスタート」が「子ども読書年」と前後し、1999年に子ども読書年推進会議(現在の子どもの読書推進会議)の研究、2000年に東京都杉並区と北海道恵庭市が「パイロットスタディ」として先行開始、

2001年より12地域で本格的に実施された。特定非営利活動法人ブックスタートが公共事業として推進(登録番号第4684870)し、市区町村自治体の公共事業として行われている。実施機会や対象月齢などは各自体によって異なるが、乳幼児健診のほか乳児全戸訪問、育児教室、図書館を会場とする場合もある。地域に生まれた赤ちゃんが集まる0歳児健診を主な会場に、図書館員、保健師、行政職員、住民ボランティアなどが活動に携わりブックスタート・パックを手渡している。2022年1月時点で、日本全国の自治体の約6割がブックスタート事業を実施している。

その後、2005年「文字・活字文化振興法」が制定され、地域における文字・活字文化の振興、学校教育に関する施策の他、出版活動への支援も推進するよう求めており、読書週間の初日にあたる10月27日を「文字・活字文化の日」とするなど、行政の読書推進に関する施策も進展している。

北海道に目を転じると、「北海道子どもの読書活動推進計画」(第5次計画—2023~2027年度)が、札幌市では、2022年5月に「さっぽろ読書・図書館プラン2022」が策定された。それまでの「札幌市図書館ビジョン」と「札幌市子どもの読書活動推進計画」を統合した新たなプランに基づき、市民の読書活動の支援やより良い図書館サービスの提供に取り組んでいる。計画期間は2026年度末までの5年間である。札幌市えほん図書館開館は2016年11月である。

このような動きと並行して、子どもの読書や絵本との触れ合いを願うたくさんの活動が行われている。

「公益財団法人ふきのとう文庫」は1970(昭和45)年、小林静江が障がいのある子どもたちのために江別市の自宅でスタートし、現在は拡大写本や布絵本などボランティアスタッフの活動を広げている。

「なかよし文庫」は1971年に広島から転居してきた山崎翠が開設し、札幌地区子どもの本連絡会に継承された。1974年に「さっぽろ文庫の会」・「図書館づくりをすすめる会」が発足し活動を継承している。

神保康子が富山県高岡から故郷旭川に戻り開設した「やえもん文庫」をはじめ、北海道内には私設の絵本文庫が多数活動している。

剣淵町絵本の館が目されるのは、公立図書館でありながら絵本に向ける町民の思いとその運営方針にある。剣淵町絵本の館の取り組みについて整理し、確認する。

また、このような活動の背景には、毎年行われる調査が示す若者の読書離れとインターネット・SNS・携帯電話依存傾向などがあり、絵本と読書を取り巻く社会環境が子どもの発育や親子関係に好ましい状況にはないという問題意識が併存している。

本稿に述べるさまざまな活動は、保育や教育の現場で、家庭で、大人が読書し絵本を読み聞かせることから豊か

な地域社会を作り、子どもの成長を願うための活動の一端であり、絵本と読書活動推進の意義と課題について確認し、今後さらにこれらの活動を発展させるための共有を目的としている。

2. 絵本の館について

絵本の館の開館は、1988年に児童書出版の編集長松居友から、絵本発祥の地と言われるヨーロッパの田園風景に似た剣淵町に絵本原画美術館を建て、絵本による文化のまちづくりを進めてみてはとの提案を受けたことがきっかけであった。

その後、町民により絵本を使った町おこしを推進する「けんぶち絵本の里を創ろう会」が結成され、同会の要望に応じて、1992年、町では古い旧役場庁舎を改修し、絵本の里づくり活動の拠点として絵本の館を開館した。

当時まだ全国のどこにもない施設絵本の館のコンセプトは、絵本の美術館、絵本の図書館、子ども絵本ミュージアム（絵本の遊び場）、絵本による子育て支援施設、絵本文化の創造発信・交流拠点施設の機能である。

さて、「絵本の力」という言葉が使われる。2000年に剣淵絵本の館で原画展を開催したスイスの絵本作家のハンス・フィーッシャーは、田舎で小さな我が子のために「ブレーメンの音楽隊」などの絵本を描いたと言われるが、そのような絵本の誕生に関わる絵本と子育てとの関わり、絵本の芸術的価値、文字・活字文化、保育・教育・医療など様々な分野での絵本の活用の可能性など指摘されてきた。

一方、剣淵町民は、絵本の持つ世界観に調和した自然や命を大切に作る町を絵本のまちづくりのコンセプトに掲げ、優しさあふれる教育や福祉と子育て支援、彩りのある町並み景観整備、にぎわいのある地域間交流を進める町のシンボルとして絵本の館を捉えている。そして、多くの人たちが心のふるさとへの想いに重ねて大切にしていけるような絵本の体験ができる時や場所を作っていくことが絵本の館の目指すことである。

3. 絵本図書館ネットワーク北海道の活動

絵本図書館ネットワークの活動は、佐賀県伊万里市など全国の各地域で進められていた家読推進活動に関わってきた人たちが、さらなる活動の進展のために、絵本を介した人づくり・地域づくりの活動に関わる学校や図書館、書店、読書サークルなどの実践事例の共有を目的として2017年に立ち上げたネットワークである。

ネットワークはそれ自体が固有の事業を推進すると言うよりは、隣接する様々な分野で絵本に関係した活動を共有し、絵本の持つ多様な魅力を探り、新たな絵本の可能性を共に考え、新たに生まれた取り組み応援しあうゆ

るやかなつながりを目的にしていけることがよいのではないかと考えている。同ネットワークが2017年に岐阜市で開催した第1回の全国イベント「絵本でつなぐ人と図書館フォーラム」の開催テーマは、「絵本のぬくもり わかち愛 子育て・絆・まちづくり」であった。

次に、それに連なる北海道ネットワークの結成からの経過は以下のとおりである。

前述の「第1回絵本でつなぐ人と図書館フォーラム」のシンポジウムにパネリストとして出席した剣淵町教育委員会教育長半田幸清が中心となり、同ネットワーク活動の道内展開を目的として、2018年に札幌に同ネットワーク代表の中島進を迎えて交流会を開催した。この時の道内からの出席者は、北海道立図書館及び札幌市子ども図書館職員、北海道子どもの本連絡会に所属する文庫の主宰者、学校教諭、読書ボランティアなどであった。

半田たちは、2019年に千歳市、剣淵町でネットワークの普及事業「音楽と絵本の世界」を開催するなどして理解者を増やしていった。

そして、道内からの全国ネットのイベント参加者などが中心となり、2020年に札幌市で開催された「音楽と絵本でつながるミーティング in 北海道」に合わせて、全国ネットに連なる道内組織である「絵本図書館ネットワーク北海道」の結成会議を開催した。

その後、ネットワーク北海道では、全国ネットの主要イベントの北海道開催を目指して準備を進めたが、コロナ禍のため、規模を縮小してようやく2021年に「絵本でタウンミーティング in 北海道」を札幌国際大学において開催した。この時の内容は、ノンフィクション作家柳田邦男基調講演と「絵本がつなぐ北海道の未来」をテーマとしたパネルディスカッションであった。

続いて、2022年に旭川市で絵本作家宮西達也講演会を開催した。

また、全国各地で絵本図書館の開設や絵本による地域づくりが進められるようになってきたことから、これらの地域を絵本図書館ネットワークの掲げる絵本の人づくり・まちづくりの活動拠点と位置づけて、ネットワーク内の連携交流の深化を図っていくことを目的として、2022年10月に剣淵絵本の館で第1回「絵本サミット」を開催した。

さらに、ブックスタートや街なか読書活動などの先駆的活動が行われてきた恵庭市で2022年11月に、「音楽と絵本でつながるミーティング in 北海道」が開催された。トークセッションでは、「家読活動」と「まちなか読書活動」に焦点を当てた討議が行われた。

ネットワークでは、2023年に恵庭市において「うちどく・まちどくタウンミーティング」の開催を計画している。

4. 読み聞かせボランティア育成

昨今の乳幼児期（0歳～小学校入前まで）の子どもを養育しているご家庭は共稼ぎも多く、多忙な母親が多い。そうした家庭の子どもに今まで以上に絵本の読み聞かせ環境を整えるにはその地域内に読み聞かせボランティアの存在を整えることも方策の一つであり、子どもが「絵本を聴きたい」と思う時間・場所に地域内に存在する大学生が対応できることは、子どもの知育の発達に大きく貢献できると同時に、ボランティア担当者が読み聞かせの必要性を強く理解し、生涯学習社会の担い手育成にも繋がると考える。

(1) 絵本読み聞かせボランティア育成研修

ア. 企画の目的

本企画は受講対象に大学生を想定した「絵本読み聞かせボランティア育成研修とフォロー研修」である。大学生が将来、親になった時に読み聞かせの必要性を強く理解・納得できる機会になり「生涯学習社会の担い手」の育成にも繋げることが目的である。

イ. 育成プログラムの範囲

乳幼児期に求められている絵本から60冊を選定し、当面、大学生をモデルケースとして検証し、拡大する予定である。育成研修の実施時期を2022年9月～12月とし、地域内各施設へのボランティア派遣想定期間を10月以降とした。

ウ. 育成研修（2日間）

担当講師は絵本専門士、対象学生は1回につき10名を想定した。

エ. フォロー研修（3回実施）

育成講習のフォローとして講師は絵本専門士が担当し、対象学生は育成研修対象者に限定して開催した。

オ. 「実施レポート」「実施施設長アンケート」

・「実施レポート」～学生記載

- ①実施施設（住所＆電話番号） ②実施施設長名（担当者名） ③実施日時 ④対象者年齢と人数 ⑤読み聞かせた絵本名 ⑥事前準備内容 ⑦読み聞かせ実施後の所感 ⑧乳幼児たちの表情（目の動き、体の動きや反応内容） ⑨今回の絵本を次に読み聞かせるとしたらの留意点、改善点 ⑩その他感じたこと、他の学生にシェアしたいこと、次回への抱負

・「実施施設長アンケート」～実施施設長記載

- ①～⑤は共通 ⑥ボランティア学生に対して感じた（声の大きさ、表情、その他） ⑦乳幼児たちの様子、反応等感じた点 ⑧次回も読み聞かせボランティア派遣を希望するか ⑨日時等の希望

カ. 地域内施設への絵本読み聞かせボランティア派遣

育成研修を継続し、想定する地域内施設での絵本読み

聞かせ活動に拡大する計画である。

(2) 読み聞かせボランティア育成研修記録

育成研修プログラム

10月15日(土) 10:00～16:00（昼休み1時間）

育成研修会場：札幌国際大学

講師：絵本専門士2名

参加者：女子学生2名 大学院生男子1名（見学）

- ・読み聞かせボランティア育成研修の目的について
- ・絵本の魅力を体感する（グループワーク）
- ・絵本の定義・絵本の歴史
- ・子どもの好奇心と絵本の関係について
- ・子ども発達段階と絵本の選書について
- ・読み聞かせ実践トレーニング（JIPC読み聞かせハンドブック参考）

10月16日(日) 10:00～16:00（昼休み1時間）

育成研修会場：札幌国際大学

講師：絵本専門士2名

参加者：女子学生2名 大学院生男子1名（見学）

- ・絵本ジャンルを知る
- ・絵本を読んでもらう心地よさを知る（グループワーク）
- ・実践へ向けて絵本の選書と読み聞かせの練習
- ・実践研修に向けての説明

実践研修1回目

10月31日(月) 16:20～17:30

実施場所：札幌国際大学附属認定子ども園

対象クラス：01.2歳児・3.4歳児・5.6歳児

それぞれに1冊ずつ各クラスで読み聞かせ

実践フォロー研修1回目

11月15日(火) 13:00～16:00

実施場所：札幌国際大学

実践研修2回目

10月31日(月) 16:20～17:30

実施場所：札幌国際大学附属認定子ども園

対象クラス：01.2歳児・3.4歳児・5.6歳児

それぞれに1冊ずつ各クラスで読み聞かせ

実践フォロー研修2回目

12月6日(火) 13:00～16:00

実施場所：札幌国際大学

(3) 育成研修参加学生の感想と今後の改善点

育成研修では、講師と参加学生との関係性の構築と絵本読んでもらうという体験をしようことを重点に開催した。絵本のワークショップ（絵本セラピー）を講義の間に挟みながら進めたことによって講師と学生の間にコミュニケーションの機会が増えた。参加学生が興味を持って話を聞き、素直な感性で受け止め理解し、吸収していることが伝わってきてやりがいを感じた。今後は講義内容の精査と研修時間の見直し、オンライン研修を検

討する。

a. 実践後の参加学生の感想

- ・繰り返しの擬音語や擬態語を乳児さん達も声に出して楽しんでいた。
- ・登場人物をイメージすることで読み方や擬態語に物語をのせることができた。
- ・「こんとあき」は読んでいる時に「ながい」と言われてしまった。年齢的に無理な絵本だったのか、単調にならないように工夫すると良かったのか課題として残った。
- ・読んだことがある子どもは先の展開をいってしまうことがあるとわかった。
- ・研修で表紙と裏表紙の絵がつながっている絵本があることを知り、子ども達の興味の対象になると実感した。
- ・子ども反応を確認しながら読むこと。
- ・絵本を読む前に自分の座る位置が適切かどうか確認すること。
- ・終わりをあいまいにしない。
- ・動物が逃げていく時の擬音や場面場面で声のトーンや早さを変えるように意識した。長め文章を読むときには始めを高めめのトーンにして飽きないように抑揚をつけることを意識した。
- ・一番の盛り上がりを読んだ後は気が抜けてしまい最後の場面が疎かになってしまったので最後まで集中して読み切ることが大切だと思った。
- ・子ども達がお話に入りやすいように声掛けしてから読み始めることが大切だと思った。
- ・繰り返しの場面などは子どもの反応に合わせて読むようにしたら子ども達の反応が良かったのでこれからも読み方の工夫をする。
- ・始まる前の手遊びから読み聞かせに入るまでの繋げ方が分からず、集中力を分散させてしまった。繋ぎなど細かい部分も想定しながら練習しようと思う。

b. 保育士からの感想とアドバイス

- ・発声や声の強弱、絵本のめくり方のタイミングが素晴らしかった。
- ・繰り返しの言葉が多く、0歳児からも楽しめる絵本の選定が良かった。
- ・緊張している子どももいたが、最後に「もういっかい」とリクエストする声もあり楽しめていた。
- ・「こんとあき」は少し長めのお話だったので、集中力が途切れてしまった子がいた。お姉さん先生が来てくれたことで興奮している様子の子がいたが、最後まで楽しんでいた。
- ・「しまふくろうのみずうみ」の年長児にピッタリの絵本だったと思う。読み聞かせをしたことがなかったのて新鮮だった。

- ・絵本を読み始める前の導入、挨拶、手遊びなどがあればよりも楽しい雰囲気でも聞けたと思う。
- ・始まりと終わりが曖昧になってしまったので、始まる前に手遊びや終わった後にひと声かけるなどがあると良かった。

c. 研修講師からの感想

- ・子ども達との距離感、絵本の見せ方、持ち方、声の出し方、声の大きさが良く落ちて子ども達に読み聞かせていた。
- ・時々子ども達の様子を見ながら読んでいた。
- ・オノマトペの読み方に工夫が感じられ良かった。
- ・何度も練習をして読み聞かせ実践に臨んだことが伝わってきた。
- ・2回目の読み聞かせ実践では、1回目の保育士からのアドバイスを取り入れ1回目のフォロー講座で各自が2回目の読み聞かせ実践に課題として上げた項目を意識して行った成果を感じた。
- ・この読み聞かせ育成研修を終えた学生が、活躍する機会を作りたい。

d. 読み聞かせボランティア育成研修を終えて

当初の企画目的より予想を上回る大きな成果を感じている。その要因を以下に述べる。

- ①参加学生の意識が高く熱心に研修や実践に取り組み、研修講師や保育士の助言を素直に受け止め吸収していた。
- ②今回初のプログラム作りとなったが、学生自身が「絵本は面白い!」「読み聞かせは楽しい」と実感できる内容にすることを意識した。読み聞かせは、絵本を読むことだけではなく、読み手と聞き手の楽しいコミュニケーションの時間であることが伝わったようだ。
- ③一般的な読み聞かせ育成研修は、座学の講座で終わるものがほとんどで、読み聞かせの実践を2回とフォロー講座を2回するような研修は実存しない。今回改めて、理論と実践とフォロー講座の三段階の構成で行ったが学生の感想にあるように非常に実りのある研修となった。

e. 今後の展望

今回の「大学生読み聞かせボランティア育成研修」は、大学生と絵本専門士、そして地域の大学と大学付属こども園が協力して実現できた。これは人と人の関りの中から生まれた喜びであり、次の活動に繋がる一歩だ。参加した学生が一年生ということなので今後も「大学生読み聞かせボランティア育成研修」に関わって頂き、地域・社会に貢献する気持ちを高め、将来自分が親になったときに役に立つ資質を身につけてほしい。

この活動が「読み聞かせ活動を主体とした地域環境づ

くり」に繋がっていくと期待し、今後は「大学生読み聞かせボランティア」の輪を広げていきたい。

(4) 「読み聞かせ活動」を主体とした地域環境づくり

今回の読み聞かせボランティア育成講座の成果を踏まえ、読み聞かせボランティア養成により、「NPO 法人ビヨルクとうべつ」が主催する地域環境作りについて述べる。

目的は小学校に上がるまでに絵本の読み聞かせによる子どもの好奇心を育む環境づくりである。〈当別発「君の絵本箱」〉により、生まれてから小学校に上がるまでに、絵本 60 冊があかちゃん（子ども）のそばに存在し、いつでも読み聞かせができる環境を作り、保護者や地域に子どもの持っている可能性を最大にするためには絵本の読み聞かせが必要だと気づいて頂くことである。

具体的には以下の活動を予定している。

a. 施策のキックオフ

2022 年 5 月 21 日、柳田邦男氏（ノンフィクション作家）を招聘したセミナーを、札幌市「かでる 27」で開催した。これは 2019 年絵本専門士養成講座の講師として柳田邦男氏が、講座の事後課題として求めた「絵本専門士として地域でどのような活動を行っていこうと考えているのか」に対して提出した内容であった。

それは「生まれた子どもの可能性を最大化する読み聞かせ活動を主体とした地域環境づくりへの仕組み提案」であり、以下のアジェンダで構成した。

- 生まれてくる子どもを地域ぐるみで歓迎する行動
- 生まれてくる子どもが自分の未来をつくる支援
- 生まれてくる子どもの精神的自立の支援
- 精神的自立には好奇心が不可欠
- 人の話を聞くこと

日本の出生数は 1948 年の 270 万人をピークに 2022 年の出生数は 70 万人台後半で前年度より 5 % ほど低減し、出生率は 1.2 % 台で過去最低水準となった。（2023 年 1 月 24 日付日経新聞）

当別町では 2004 年 118 人であった新生児は 2020 年には 48 人となり、全 43 町内会の中には 1 年間に一人も子どもが生まれない地区もあった。更に「7 人に一人は相対的貧困」との厳しい現実がどの市町村にも起こっているとすれば、産まれてきた子どもはその地域の宝物ものとして皆で喜び合い、その子の成長を地域を上げて支援しても良いのではと思う。

b. 子どもが自分の未来をどう作るかの支援

恵まれない出産やシングルマザー・ファザーによる子育て、多様化した現在は生まれた子どもには受難の時代でもある。そのような子どもを親の養育環境のみに拘ら

ず、地域のお節介な大人たちが知恵を出し合い寄り添うことが重要と考えている。

子どもの持っている自分自身の強み、可能性、将来像を子ども自身が見つけること、気づくことができる環境をどう作るのが、親のみならず周りの大人の役割ではないかという視点から、子どもの親に限らず「周りの大人の役割」としたことの意味である。

江戸時代には“子どもは長屋全体で育てる”と伝えられている。

c. 子どもの精神的自立の支援

現在の子どもの将来は、多様性・複雑性が増しており、親世代が全く想像の及ばない時代環境に向き合わなくてはならない。そうであるならば親の子育てにおける「ねばならない」「かくあるべき」という、前提は極力押し付けられない方がよいということになる。終身雇用が終焉を迎えようとしている今、求められているのは、いかなる環境・条件の中においても自らの能力と可能性を最大限に発揮して、道を切り開いていこうとする姿勢を持った人材であり、精神的自立が求められるのではないだろうか。

精神的自立を支えるものの一つが「好奇心」であると考えている。児童心理学では好奇心は 10 歳（小学校 4 年生）がピークで以降は少しずつ下がっていくという。10 歳までその子の持っている好奇心を最大にする環境をどのように形成するか。社会で求められるスキルは時代によって変化しており、その変化に対応するスキルを得るためには、年齢を重ねても好奇心が求められるからである。

d. 人の話を聞くことと絵本の読み聞かせ

小学校に上がるまでの目標の一つである「人の話をきく姿勢を身につけること」に注目したい。小学校では椅子に座って授業を聞けず、立ち歩きをする子どもが増加しているという。

五感のうち最も先に獲得されると言われるのは聴覚である。それは人が生きて行くためには聴くことが生きることの全てに優先するからだという。そして視覚がついてくる。

絵本は聴覚と視覚につながる最も身近な存在であると考えられる。親の会話だけを聞いて育つか、生まれた直後から語り続けられた絵本を「生の言葉として」読み聞かせるか、どちらがその子どもの好奇心を導き、結果、その子どもにしか備わっていない可能性に自ら気づききっかけになるかは歴然であろう。

e. 今後の活動

昨今の多忙な親の代わりに、周囲の大人や学生（大学生や高校生）がその役割を果たせるようなサードプレイ

ス（第三の場所／学校や家庭や職場ではない）を、地域の中に創造することが大切だと考える。

地域に生まれ育つ子どもたちの20年後を想像し、自らの可能性や好奇心を最大化して得た強みや能力に気づくため、最も重要な0歳から6歳までの育成環境がどうあるべきなのか、未来から現在を俯瞰した時に地域の大人の役割があると考えます。

ここまで話を進めて初めて「0歳～小学校上がるまでに日本&世界の絵本の名作60冊を読み聞かせしましょう」という主張に行きつくのである。更に前述の「好奇心」の最大化にもっとも必要な環境は「自然」である。子どもたちの持っている五感を開放するのはやはり太陽の下、動植物に囲まれ、風に吹かれながら、手足を思いっきり伸ばして、走り出したくなる自然環境なのである。そのきっかけとして本セミナーが位置づけられ、新しう次の展開が起きようとしていることを付記したい。

2022年7月1日に「子ども未来 with 北海道」を組織し、以下の二点をポイントとした。

- ① 公的な機関に頼り過ぎない
- ② 単発&一過性ではなく、絵本に興味のない人を巻き込んで行く裾野の拡大

事業名として「子どもが北海道の自然と共生し、絵本普及活動と共に地域子育て環境創造事業」を2023年4月から展開予定である。

5. 考察とまとめ

絵本図書館ネットワークはその趣旨に賛同する多様なメンバーで構成されている。大学教授、学校教員、学校司書、公共図書館の司書や職員、保育士、学童保育所、子育てサロン、子育て支援施設の支援員、読み聞かせボランティア、児童書や絵本専門店の方、絵本カフェの方、子ども読書推進団体の方、絵本出版社の方、絵本作家、アナウンサー、音楽教室講師など様々である。

そしてメンバー一人ひとりがその所属や専門性、実践活動をベースとしたネットワークの情報交流等におけるテーマ設定への関わり、実践事例提供の役割、ネットワーク会員間の情報交流・調査研究交流をつなぐことが役割である。

絵本図書館ネットワークを生かした個別の実践例として、剣淵町では、絵本サミット in 剣淵の開催、全国学校図書館協議会の主催する「詩のろう読コンクール」や埼玉県三郷市の「家読郵便コンクール」への参加、東京都荒川区立図書館「ゆいの森」との「パチパチの日イベント」の開催、(8月8日の紙芝居の日を記念して紙芝居発祥の地荒川区のゆいの森との紙芝居イベントの同時開催)、絵本セラピストの養成、剣淵高等学校の絵本授業などへと活動の幅を広げた。

ここで、社会教育分野の生涯学習と地域づくり活動推

進の観点から絵本の持つ力と絵本の活用について触れたい。戦後の地域づくり(コミュニティ施策)は、「知の地域づくり」～「生活文化づくり」～「生涯学習のまちづくり」～「協働のまちづくり」～「コミュニティネットワークづくり」の流れを持つが、社会教育主事等の地域づくり活動の現場の当事者の地域との関りや対人支援の方法論としての、「届ける」～「集める」～「集う」～「伝える」～「つなぐ」について理解することは、保育専門職となり絵本を介して幼児の家庭や地域と関わっていくうえでの貴重な手がかりとなるのではないかと考える。

次に絵本の持つ力について考えたい。絵本に本物を探し求める人たち、絵本で多様な価値観や社会の事象を描き伝える人たち、絵本でより良い生活文化や人生を広げていこうとする人たち、そのような人たちをつなぎ、そのような人たちと活動を共にしていく先に絵本のさらなる境地(フロンティア)が広がっていくのではないかと考える。今世界が直面している課題に向き合うことができるのも「絵本の力」である。

1988年に剣淵に絵本による文化の町づくりを提唱した松居友は、町で開かれた公民館講座のなかで、絵本が持つ力は何かという町民の問いにこう答えられた作家が描いた本物の言葉と絵を物心がつく時期の子どもに伝えていくことで、この先に、傾き、間違っただけへ行かされた社会を子どもたちがきつと復元してくれるでしょう。この「復元力」は、SDGsの「古きを生かし新しきにつなぐ」のサステナブルの思想につながる。

絵本作家のヨシタケシンスケは、剣淵小学校の絵本作家授業で子どもたちにこう話しかけていた——みなさんが書く詩や作文、絵や工作は投げないで大切にしておいてください。大きくなってから自分を励ます大きな力になってくれますよ——これはポートフォリオとしての効果という意味であろう。

学童クラブを開いていた谷地元雄一は、絵本は図書館で読み聞かせるのではなく、外で水遊びをしたり、虫を捕まえたりした後に土に敷いたゴザの上でついでに読んであげるのがいい」と述べている。絵本は子どもたちの時間のなかでこそ生きるものであり、子どもの遊びと絵本の活動を子どもの生活文化したい」とも話している。

さらに、至光社の創設者の武市八十雄は絵本とは何かについて、「その場に描かれた作品に、描いた画家の感じる心が画面から1ミリメートルぐらいのところに花の香りのようにただよっているかに、かかっているのです。」と言っている。それを感じることができるのが大人になっても持ち続けたい「子どもごころ」であり、「わかるということ」は「感じて心でわかる」ことである。

現在の文字・活字文化の変化と紙媒体での出版活動の縮小のなかで、絵本が出版文化をけん引しているとも言われており、絵本の持つ柔軟性が注目されている。

読書バリアフリーと音声化などの課題に対する取り組み

みも絵本の創作、出版、活用の各分野に関わる人たちによって進められている。

6. 今後の課題と予定

絵本図書館ネットワークが計画している今後の活動は以下の通りである。

① 音楽と絵本でつながるミーティング

絵本図書館ネットワークの活動を全国的に展開していくための地域の拠点作りの役割を持っている。北海道では、これまで釧路、札幌、千歳で開催しており、2023年1月に秋田で開催した同ミーティングは、全国の絵本館、絵本図書館、高齢者福祉施設などをオンラインで結んで行われ、今後のWithコロナ時代の新たな活動展開に道を開いた。

② 絵本でタウンミーティング

2017年から全国規模の絵本でつなぐ人と図書館のフォーラムを開催してきたが、コロナ禍により2020年からは地方ごとのタウンミーティングとすることとした。

③ うちどく・まちどくミーティング

絵本による読書推進活動の新たな展開事例の共有を目的として、2022年12月に京都市で開催した。2023年は北海道恵庭市での開催を計画している。

④ 絵本を楽しむ講演会

絵本の魅力を広く伝えていくことを目的として、著名な絵本作家を招聘しての講演会を行っている。

⑤ 絵本サミット

全国の絵本で地域づくりを進めている町や絵本図書館に関係者が集い実践研究や交流を図ることを目的として、2020年に第1回サミットを釧路絵本の館で開催した。第2回は2023年に富山県射水市大島町で、第3回は2024年に和歌山県有田川町での開催を計画している。

⑥ 子ども読書推進代表者シンポジウム

子ども読書活動の推進に関わる開催機関・団体の代表者、大学等の研究者、学校や公共図書館などの関係者、読書推進ボランティアなどが会し、子ども読書推進活動の推進に関する情報交流を目的として2016年度から毎年東京都で開催している。

さて、「絵本図書館」についてであるが、法令や基準に基づく図書館施設を指す用語ではない。同ネットワーク設立時からの支援者であるノンフィクション作家の柳田邦男が提唱する緑陰図書館とは、公園の木陰のベンチの横に置かれている絵本箱のように人々の生活のなかに絵本や読書の環境があることを指している。都市の一般書閲覧室の片隅に置かれた児童図書コーナーで親と子が遠慮がちに声を潜めて本を借りていく図書館の在り方ではなく、絵本や児童書のスペースが最初にあり、そこで声を

出して子どもに読み聞かせをしたり、子どもと大人が絵本の遊びの体験ができる施設とすることが全国に広がりを見せている絵本図書館の姿であると考ええる。

また、和歌山県有田川町では、街中の公共施設等に絵本・児童書の利用スペースを配置する分散型の絵本図書館の充実が進められている。佐賀県武雄市では、絵本図書館と高齢者福祉施設と幼稚園を同じエリアに開設して地域活性化を進めている。宮城県女川町では、東日本大震災の被災からの復興の取組のなかで「女川つながる図書館」プロジェクトが進められた。

このように、絵本図書館をコミュニティの核にした多様な試みが全国的にみられる。これらの取組は、もともと公共図書館が持つ人と人をつなぐ役割を深化させ、地域の多様なコミュニティネットワークを形成していく力を絵本図書館が備えてきている証左であると考ええる。

そこで、絵本図書館及びネットワークを地域の重要なソーシャルキャピタルとしての位置づけから捉え、結束(bonding)、橋渡し(bridging)、連結(linking)の機能面から今後の絵本図書館ネットワークの姿を考えていくことができるのではないか。

【謝辞】

今回の読み聞かせ研修講座は3か月に及んだが、講義とフォロー研修合わせて4回の会場としてご協力頂いた札幌国際大学と2回の実践会場となった札幌国際大学付属認定子ども園の存在があったからこそ実現できた。

絵本60冊の選書については、札幌市内の絵本専門店「ちいさなえほんやひだまり」の店主青田正徳氏にお力をお借りした。

ここに記して、感謝申し上げる。

【引用文献】

- 1) 石川由美子(2017) 絵本の読み合い活動における読み手と聞き手の関係性の促進に関する実証的研究. 平成27年度～平成29年度化学研究費補助金・基盤研究(c)報告書(15K01770)
- 2) 石川由美子・前川久男(1996) 絵本理解とその発達順序性—発達援助としての絵本利用の基礎研究—. 心身障害学研究, 20, 83-91.
- 3) 松井直(1978)『絵本をみる眼』日本エディタースクール出版部 32-67.
- 4) 荻野亮五(2020) With コロナ時代における地域のつながりづくりの方法. 日本公民館学会年報, 17.
- 5) 谷地元雄一(2000) 絵本の底から. 福音館書店
- 6) 武市八十雄(1986) えほん万華鏡. 岩崎書店

【参考文献】

- ・石川由美子・石川隆(1994) 絵本の特性に関する研究. 日本保育学会第47回大会発表論文集, 564-363.
- ・石川由美子(2009) 子どもの認知発達を促す最近接発達領

- 域を生み出す「場」としての絵本についての一考察. 聖学院大学論叢 第22巻第1号
- ・石川由美子(2011)人工物(artifact)としての絵本—母親の子どもの認知発達に関する絵本への期待調査から—, 聖学院大学論叢 第24巻第1号
 - ・石川由美子(2021)絵本を媒介とする母子活動が乳幼児の絵本認知に及ぼす発達的变化. 宇都宮大学共同教育学部研究紀要 第71号
 - ・小川洋子(2007)『物語の役割』ちくまプリマー新書053
 - ・佐々木宏子(1975)絵本と想像性:三歳前の子どもにとって絵本とは何か. 高文堂.
 - ・ジム・トレリス(1987)『読み聞かせ この素晴らしい世界』高文研
 - ・高木和子(1978)物語シエマの形成における幼児むけ物語のもつくり返し構造の役割. 山形大学紀要(教育科学), 7(1), 83-105.
 - ・津守真・稲毛和子(1965)乳幼児精神発達診断法(3~7). 大日本図書.
 - ・永田桂子(1985)乳幼児絵本の機能的側面についての一考察:事例研究を通して. 日本保育学会第38回大会発表論文集, 156-157.
 - ・末盛千枝子(2010)『人生に大切なことはすべて絵本から教わった』現代企画室

- ・松井直(1990)『絵本・物語るよろこび』福武書店
- ・松井直(2004)『絵本を読む』新装版 日本エディタースクール出版部
- ・松居直(1981)わたしの絵本論:0歳からの絵本. 国土社
- ・松岡享子(1987)えほんのせかい こどものせかい. 日本エディタースクール出版部.
- ・松谷みよこ・瀬川康男(1967)いないいないばあー. 童心社.
- ・三宅信一・清水貞夫・及川克紀(1984a) Ordering theory の諸手法の比較:データにおける順序性判定基準の検討. 電子通信学会教育技術研究報告, ET83-10, 45-48.
- ・三宅信一・清水貞夫・及川克紀(1984b) Ordering theory の諸手法の比較(2):仮想データによる検証. 電子通信学会教育技術研究報告, ET84-25-29.
- ・村中李衣(2002)『子どもと絵本を読みあう』ぶどう社
- ・山崎翠(1986)『子育てに絵本を』エイデル研究所
- ・柳田邦男(2009)『みんな、絵本から』講談社
- ・脇明子(2008)『物語が生きる力を育てる』岩波書店
- ・渡部茂男(1978)絵本の与え方. 日本エディタースクール出版部.
- ・山口茂嘉・高橋敏之・小坂圭子(1994)幼児期における言語環境としての絵本に関する一考察. 岡山大学教育学部紀要, 97, 41-46.

